◎小学生の部

その他の良い作品

ホタルの光

井泉小学校　四年
飯塚　皓耶

ポッ、ポッ、ポッ
夏になるとあらわれる
大きくはない
けれども
小さくはない
ホタルの光

それは、ホタルにとって　会話
ぼくらにとって　心安らぐ　光

だが、その光は
年々へっていく

でも、今年のホタルはちがっていた
今まで見た中で　一番だった
その数も美しさも

そこに　ここに
ポッ、ポッ、ポッ、
ぼくのまわりに
小さな光
ぼくのまわりに　集まる光
まるでぼくを
待っていたかのようだ

水の中でボーッと光っているホタル
田んぼの上をさまようホタル
草の間で休むホタル

ここは井泉の発戸
ホタルの里の会員のみなさんのおかげ
「きれいな水に　きれいな土が
　必要だよ。」
と話す会員のみなさん

来年も、さ来年もホタルの里に
たくさんのホタルが舞うように

おじいちゃんのあじ

須影小学校　二年
江原　知花

「ほら、あまーい、いちごだぞ。」
「とりたての　トマトだぞ。」
すぐちかくにすんでいる
わたしの　おじいちゃんは
まい日のように
とりたてのやさいやくだものを
どっさりかかえて、もってくる。

やさいぎらいの弟も
おじいちゃんの作る
とりたてのやさいだけは
「あーあ、おいしいー。」
といってたべるんだよ。
あまくてプーンといいにおい

キャベツ・レタス・ブロッコリー…。
ブルーベリー・ぶどう・みかん…。
りょう手に　かかえきれないくらい
おじいちゃんの作るやさいやくだものは、
とくべつ　あまくて　おいしいんだよ
どろのついただいこんやじゃがいも。
かぼちゃ・きゅうり・なす・ピーマン…。
みんな、おじいちゃんのあじがする。

とってきてくれたたまねぎややさいで
おかあさんが　サラダやにものを作ると
プーンて　いいにおいがしてくるんだよ。
できあがりが　まちどおしい。
早くたべたいなぁー。
「あーあ、おいしい。おかわり。」
いつも　いつも　おかわりをするんだ。
これからも　やさいやくだものを
ずっと　ずっと
たくさん作ってね。
おじいちゃんのあじは
いつも　あまくて　おいしいよ

ザリガニつり

川俣小学校　二年
大山　修弥

夏の日のごご
ぼくたち兄弟は　おばあちゃんと
ザリガニつりをする
夏休みのたのしみの一つだ
おばあちゃんのいえのよこのよう水ろで
ザリガニをさがす
「あっ、いた。」
どろの中にかくれているザリガニが
うごいた
こっそりあみをちかづけて
ザリガニのうしろにあみをおく
「つかまえた!!」
バケツの中におよがせる
赤やちゃ色のザリガニが
バケツの中であばれてる

バケツをもってかえったら
ザリガニにえさをあげる
「いっぱいたべろよ。」と
とてもうれしい気もちになる

夕がたになったら
またバケツをもって
よう水ろに行く
ザリガニをにがしてあげるんだ
「だれにもつかまるなよ。」
ぼくは心の中で言ったんだ
また来年の夏も
たくさんつかまえられるといいな
ぼくは来年の夏がたのしみになった

「愛宕神社」

新郷第一小学校　五年
柏瀬　有花

ドン　ドン　ドン
太この音が　鳴りひびく
愛宕神社の夏祭り

新郷に引っこしてきて
四度目の夏
わたしの家から愛宕神社は
歩いて十分ほど
でも愛宕神社に行ったのは
今回が初めてだ

今年は　父が年行司で
神社の草取りをしたり
お祭りのじゅんび
しめなわ張りや
あんどんに灯りを入れたり
いつもは　見ているだけだったお祭りが
父たちがじゅんびするのを見て
お祭りをするのは
大変だと思った

でも　ずっと昔から続くお祭りを
絶やすことなく
守っていかなければならないそうだ

わたしの住む新郷の歴史を見ると
四百年以上前に
徳川家康が立ちよったお寺があったり
関所があったりと
とても歴史のある場所だと知った

そんな歴史のある土地の
伝統ある行事を　大切にして
絶やすことのないよう
わたしも　見守っていきたいと思う

とねがわ

川俣小学校　一年
須永　理央

なつやすみ　じてんしゃにのって
とねがわにいった
うちのちかくにてっきょうがある
うちの二かいからもでんしゃがみえるけど
てっきょうのそばで
でんしゃをみるのがだいすきだ

でんしゃがはしるのをちかくでみると
すごくはやくて　ちょっとこわい
きょうはゆうきをだして
てっきょうのしたにはいった

でんしゃがせまってくる
ものすごいおと
おとにとばされそうになる
いもうとは　こわくてなきだした
わたしは　どきどきした
でも　たのしい

とねがわのどてのうえから
うちの二かいのまどがみえた
とねがわをみおろすと
くさがゆらゆらゆれていた

天神様

羽生南小学校　四年
瀧澤　さゆり

わたしの家の近くには、
天神様がある。
羽生城跡天満宮と表記されているが、
みんな天神様とよんでいる。
天神様の境内で、
お父さんと遊びながらわたしは
梅の花をいつも見ていた。
ここには、菅原道真がまつられている。
学問の神様らしい。
道真は、梅の花が好きだったという。
おばあちゃんが教えてくれた。
天神様には大きな牛がいる。
おばあちゃんが子どものころからいる。
天神様にはブランコがある。
おばあちゃんが子どものころからある。
おばあちゃんが子どものころは、
はだしでかけて遊んでいたと聞いた。
お母さんも梅の花を見ながら
ブランコで遊んでいたと聞いた。

わたしも天神様のブランコに乗って遊んでいる。
おばあちゃんのあそび場。
お母さんのあそび場。
わたしのあそび場。
みんなここで遊びながら
泣いて、笑って大きくなる
わたしが親になり
わたしの子どもの遊び場にもきっとなる。
時が流れて、時代が変わっても
梅の花はかわらず満開に咲き、
天神様は、
わたし達をいつまでも
見守ってくれている。

約束

新郷第二小学校　五年
萩原　一帆

「なあにやってるんですか」
そういっていつも居間に入ってくる
えびす様のようなやさしい笑顔と一しょに
ぼくにとって　おじいちゃんは
最高のおじいちゃんで
最高のともだちでもある
ぼくが悲しい思いをしたときは
「おい　お前さん　大丈夫ですか」
となぐさめてくれる
ぼくにうれしいことがあったときは
「お前さん　よかったねえ」
といっしょに喜んでくれる
がんばったときは
「よおくがんばったでえ」
とほめてくれる
またあるときは
ひみつきちをいっしょにつくってくれて
ゴム鉄砲や竹馬をつくって遊んでくれて
暑い日には　アイスをいっしょに食べて
色んな話をする
そんなおじいちゃんが
ぼくは大好きだ
もっといっぱい喜ばせたい
もっといっぱい話したい
いつか　ぼくがそうじゅうする
グライダーに乗せて
大空をさんぽしたい
だから　おじいちゃん
いつまでも元気でいてね
約束だよ

ひやじる

村君小学校　三年
平井　尊琉

毎年夏になると
ひやじるが食たくにならぶ
じいじがうどんをうち
ばあばが天ぷらあげてくれる
天ぷらの野さいは
お父さんがそだててくれた
玉ねぎ、ナス、いんげん、人じんなど
お母さんがひやじるを作る
ひやじるのざいりょう
きゅうり、しそ、ごま、みそも
自家せいだ
ぼくと妹はりょう理のお手つだい
家ぞくみんなで作る
ひやじるうどん
とってもおいしい
みんなでワイワイ食べる
ひやじるうどんは
もっとおいしい
そんなひやじるがぼくは大すきだ

また来年も
みんなで作って食べられるといいな
ぼくの大すきな家ぞくとひやじる

かぶとむしのき

村君小学校　一年
細井　大暉

おばちゃんのいえにあるおおきなき
みつがいっぱいでているよ
たくさんむしがあつまるよ
かぶとむし、くわがたむし、かなぶん、おお
すずめばち、ちょうちょ
ごはんをたべたり、おはなししたり、けんか
したり
ぼくとおねえちゃんみたいだね
ぼくのいちばんすきなむしは、かぶとむし
おおきなつのがかっこいい
くろくてピカピカしてるからだは、よろいみ
たい
たたかうときは、おおきなつのをあいてのし
たにいれてもちあげる
とろうとして、てをのばしたら、うえににげ
ていったよ
うえでとまってしずかにしているよ
きゅうに、くろいはねをひろげたよ
つぎに、うすいはねをひろげてとんだよ
「ブーン」とおとをたてて、すぐにみえなく
なっちゃった
ちがうかぶとむしのきをさがしにいったのか
な
なかまをさがしにいったのかな
みつがいっぱいのこのかぶとむしのき
またらいねんのなつもこのきで、かぶとむし
にあいたいな

一本のスプーン

羽生北小学校　六年
堀口　真祈子

私の家にある
ステンレス製の一本のスプーン
持つところが少し長くて
ものを乗せるお皿の部分は
ふつうのスプーンよりも
細くできている

そう、これは
赤ちゃん用のスプーンなのだ

四十七年前
お父さんがまだ赤ちゃんのころ
おばあちゃんが買ってきたスプーンなのだ

お父さんはこのスプーンで
りにゅう食を食べていた
そしてお父さんの弟も
私のお兄ちゃんも
私も

このスプーンでりにゅう食を食べた

きっとこれから先
お兄ちゃんの子どもも
私の子どもも
このスプーンで
お母さんの作ったおいしいりにゅう食を
食べるだろう

この一本のスプーンは
私の家で
ずっとずっと使い続けていく
大切な大切なスプーン

このスプーンで
おいしいりにゅう食をたくさん食べて
みんなが大きくなっていく
そしてりっぱな大人になる

おじいちゃんの作るお米

三田ケ谷小学校　六年
松本　成生

今年もこの季節がやって来た
この季節というのは、おじいちゃんのお米を
作る季節のことだ
ぼくはいつも、おじいちゃんの手伝いをする
なぜなら、ぼくの将来の夢は農家だからだ
おじいちゃんの手伝いをすることによって
自分の夢に、一歩近づけるような気がする
なぜ農家になりたいかというと、おじいちゃ
んの仕事を引きつぎたいというのもある
でも一番大きな理由は人の役に立ちたいとい
うこと
おじいちゃんは、作ったお米を地域の人に分
けている
地域の人はとても喜んでいる
ぼくも大人になっておじいちゃんと同じよう
に人の役に立ちたい
そう思ったからだ
だからこれから、もっといろいろな体験をし
て農家のことを学びたい
そしてこのふるさとでお米を作り地域の人に
喜んでもらいたい

とうぶいせさきせん

手子林小学校　一年
三牧　莉奈

「ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。」
まいにちきこえるおと。
わたしのいえのまえのせんろを
まいにち、でんしゃがはしっている。
わたしがてをふると、
しゃしょうさんも　てをふってくれる。

あさのでんしゃは
おとうさんみたいなスーツのひと
おにいちゃんみたいなせいふくのひと
いろんなひとをのせてはしる。
みんな、どこまでいくんだろう。

わたしもこうこうせいになったら
でんしゃにのって
がっこうにいくのかな。
おしごとするようになったら
でんしゃにのって
かいしゃにいくのかな。

たのしみだな。
「ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。」

「いってらっしゃい。」
「おかえりなさい。」
でんしゃのこえが、きこえてくる。

◎中学生の部

その他の良い作品

小さい花

東中学校　二年
青木　結香

小さい花
マッチ棒の先位の大きさ
根はなく
沼や池の水面に浮かぶ水草
水生食虫植物
タヌキの尾の形に似ている
その名は
『ムジナモ』
二枚貝のような袋状の葉
ミジンコやプランクトンを捕え
栄養にする
花の色は白か緑白色
夏のよく晴れた日に
わずかな時間に一度だけ咲く
条件が悪いと咲かないこともある
『幻の花』と言われる
そんなムジナモは
今は自生地は少ない絶滅の危機
天然記念物になっている
宝蔵寺沼に繁殖している
『ムジナモ』
それは
ふるさとの花

暑い夏

西中学校　三年
石井　結

みーんみーんみんみん　ジー
蝉しぐれから始まる夏
ああ。もう夏なのか。
入道雲が空に広がる夏
同じ空が紺色に染めあげられるとき
あざやかな幾多の花が散る夏
田んぼもいよいよ生い茂り
私の好きなにおいがただよう夏

同じ夏の七十年前、赤い火の花が
いたるところに落ちたそうだ
食べ物も家族も恋をも失ったあの夏の日
そんな中でも、希望を捨てようとも
しなかった先人たちに祈りつづける
このお盆の日。
先人たちがつくりあげた平和を
かみしめる
露のようにはかない世の中だけど
この夏の日は忘れてはいけない

未来のために。

庭の雑草

東中学校　三年
市村　瑠唯

今日も庭の花が元気がない
水をあげているのにかれそうだ
水がもっとほしいのかな
でも　雑草は元気いっぱい
ぴんぴんしていた
どうしてなんだろうか
水をあげていないのに
雑草を抜いてみると
根は長くてとても太かった
細い根もたくさんあった
筆のようにフサフサ
カブトムシの幼虫に
細長いミミズ
茶色のサナギ
アリの巣も発見した
土の中は　虫たちの家だった
昨日小さかった草でも
今日には大きくなっている
抜いても抜いても
何度も生えてくる

きっと　根があるおかげなんだね
雑草は強い
雑草は支えられている根に
伸びていく
どこまでも
私もしっかりした根っこをもって
生きたいな

この町の猫

西中学校　二年
角田　実優

赤い屋根の上
ねむたげな猫
こちらを見ては小さく鳴くんだ
何を言っているのか
私にはわからない
自由に歩き
自由に寝て
自由に生きる
でもこの町
羽生という町、ふるさとから
はなれるなんて一度もない
どんなに遠くに行ったとしても
必ずここに帰ってきて
必ずここで眠るんだ

赤い屋根の上
ねむたげな猫
こちらを見ては小さく鳴くんだ
何を言っているのか
私にはわからない
けれど
貴方も私と同じでしょ？
この町が大好きなんだ

祖母から母へ

東中学校　三年
北林　美路

夏になると我家では冷汁
暑くなると思い出す
祖母の家でも冷汁
ごまや大葉の香り
甘味噌のバランス
夏野菜のきゅうり
冷たい氷水
合体した味は美味である
祖母の味も母の味も
全く一緒だ
ごはんにかけて
うどんにかけて
さらっとのどを通っていく
私はこの味が大好き
今年の夏は
あと何回食べられるのか
楽しみ・・・
私も母から教わろう
ずっとずっとこの味を
つなげていつまでも

羽生の言葉で

西中学校　三年
関矢　花鈴

「これはうまげだで。ちょっとよばれるかな？」
夕食の時、祖母が言う。
なんのことかわからず私は聞きかえす。
「え？なに？」
祖母は八十九歳。私は十五歳。
「これはおいしそうだね。ちょっとちょうだい？」
と言う意味らしい。
祖母とは、生まれた時からずっと一緒だ。
だけど、私にはよくわからなかった。
「よばれる」と言う言葉が、
「ちょうだい」と言う意味なんて。
まだまだ、私の知らない、
羽生の言葉「羽生弁」があるのだろう。
若い人は標準語になり、
年寄りだけが「羽生弁」を使う。
そして、だんだんと、
若い人は標準語になり、
「羽生弁」がなくなっていくのだろうか。
私のふるさと「羽生」での「羽生弁」

四十年、五十年後にはもう、
「羽生弁」が聞けなくなってしまうのだろうか。
そう思うと、私はすこし寂しくなった。

ずっと一緒

東中学校　三年
福田　あみ

「ひいばあちゃん！遊ぼう!!」
これが小さい頃の私の口ぐせ。
私とひいばあちゃんは仲良しだった。
一緒におままごとしたり、
一緒にテレビを観たり、
まるで姉妹のようだった。
段々大きくなるにつれて、
私は遊ばなくなったけど、
ひいばあちゃんとお話しすることが
すごく楽しかった。
これからも一緒にいたかった。
でもひいばあちゃんはこの世にいない。
三年前に死んでしまった。
私はすごく悲しかった。
もっと遊んでいたかった。
もっとおしゃべりしたかった。
ずっと一緒にいたかった。
そう思うと涙が止まらなかった。
すると泣いている私に祖母が、
「亡くなってもずっと一緒にいる。」
と、はげましてくれた。
その言葉を聞いて私は元気になった。
私の胸の中で一緒にいるんだ、
私は嬉しかった。
そして今。
私は受験生になった。
勉強は大変だけど、
絶対合格出来ると思う。
だって、
ひいばあちゃんが見守っているから、
ひいばあちゃんが応援しているから、
ずっと、ずっと、
一緒にいるから。

サケの放流

東中学校　三年
増田　花恋

小学生の頃
毎年利根川にサケを放流した
私が楽しみにしていた行事の一つだ

サケの卵を持ち帰ってからは
毎日朝晩卵が入っているビンをのそいた
卵はだんだん変化していった

ふかして、稚魚になったら
しっぽをゆらゆらさせていた
魚らしくなってきたサケの稚魚は
オレンジ色のお腹になってきた
しばらくお腹の栄養で成長するみたいだ

サケを放流する日
なんだか淋しくなった
今まで見守ってきたサケの稚魚たちが…。
「海まで辿りつけるのかな？」
「７年後戻ってこれるかな？」
と心配な思いと
「みんな、はぐれないように仲良く泳いで行くんだよ！」
と、見守る思いとが
次々と込み上げてきます

小学校での行事が
伝統行事としてひきつがれて行きますように…。

真似できない底力

東中学校　一年
増田　凪紗

私が住んでいる所は
海もなければ、山もない
利根川をほこるのどかな町だ

田畑が海のように広がり
風になびくイネは緑の波のようだ
雨が降るとカエルの大合唱・・・
イネはキラキラうれしそう

夏はじりじり、日差しが矢のようだ
平野なのでとても暑い
突然おこる地震や台風、長く続く雨以外
ほとんど災害の少ないのんびりした町だ

田畑ではお年寄りが大活躍
あちこちに腰を曲げたお年寄りの姿
どんなに暑くても日差しを避けるように
長袖、長ズボンで頑張っている
作物も育つが、雑草もまた育つ

日々、追いかけっこだ

毎日毎日、同じ事のくり返し
コツコツ、コツコツ
弱音を吐かずに作業している姿に
頭が下がる思いだ
おじいちゃん、おばあちゃんの力はすごい
私には真似できない事だと思う
この姿を見習って、私の今の仕事である
学業に生かしていきたいと思う

最高の仲間

東中学校　三年
矢崎　めぐみ

私は部活を三年間やってきて、最高の仲間ができた。
みんなで嬉し涙を流したり、時には悔し涙したり、たくさん笑ったりもした。
私が今、その仲間に伝えたい言葉は、
「ありがとう」
努力も感動も辛いこともみんなで分かち合って。
こんなにいい仲間と卓球ができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。
遠征にもたくさん行って。
毎日家族のようにみんなで一緒にいた。
この三年間は絶対に忘れることのできない、私の宝物。
その三年間の中で、関東という舞台に行けたことがすごくうれしかった。
関東を決める試合も、泣いて。
泣きながら試合をしたのは初めてだった。
みんなで声を出して応援して。
みんなで勝ち取った関東への切符。
すごくうれしかった。
学総でも関東に行く
その目標には届かなかった。
けど、このメンバーで試合ができたことには悔いはない。
最高の仲間と卓球をした三年間はとても短かった。
三年間ありがとうございました。
最高の仲間ができて私は幸せです。

蝉の鳴き声

東中学校　三年
横山　拓実

日光がアスファルトに反射して、目に突き刺さる。
汗でＴシャツが背中に張りついている。
蝉の声がどこからか木霊して聞こえてくる。
まるで真夏日を主張するかのような鳴き声だ。
信号が赤から青に変わった。
僕は自転車のペダルをこぎ始める。
いつもよりもペダルが重いように感じる。
さすがにこの暑さでは、家から外にでる人も少ないようだ。
車があまり通らない道を僕はだらだらとこいでゆく。
このスピードだったら近所の元気のいい小学生に追い抜かれてしまいそうだ。
僕は家で育てているナスのことやこないだのテレビのことなど、どうでもいいことを考えながら自転車をこいでいく。
だんだんと暑さで頭がぼんやりとしてくる。

僕が生まれた日は六月の大雨の日だったそうだ。
僕はなかなか生まれてこず、僕が生まれた日は予定日を過ぎていた。
でもその日には、家族や親戚が見に来てくれた。
僕はそれを聞いた時とてもうれしくなったことを今でも覚えている。
僕はまたペダルをこぎ始めた。
今度はもっと強く。
坂道になっても、立ちこぎでぐんぐんと進んでいく。
家族に「ありがとう」と言うために。
きっと僕が今、この時代にこの場所にいることは、すごい確率なんだと思う。
空を見上げると、とてもすがすがしい青空だ。
僕は立ちこぎでさらにスピードを速めていく。
背負い風で自転車が走っていく。
車が一台も通らない、誰もいないこの道に蝉の鳴き声だけが木霊している。